



岩国労働者反戦交流集会



11月26日・27日の2日間を「岩国反基地行動」、27日夕刻から28日にかけて「上関原発についての行動」に、執行部4名で参加しました。

26日は2部形式で15時から「岩国労働者反戦交流集会2022」が開催されました。実行委員会より集会基調提起がされ「沖縄のたたかい」「技能実習生問題」「首都圏のたたかい」の3点の発言がありました。アピールでは「関生弾圧高槻生コンのたたかい」が報告され、参加者の意思を共通のものとし終了しました。

続けて、「2022岩国国際連帯集会」が開催されました。基調報告の後、「AWC韓国委員会」「台湾労働人権協会」より海外からの連帯メッセージを受けました。広島からの報告「呉基地から見

た自衛隊の変貌・日米軍事一体化」、岩国からの報告「中国・台湾・朝鮮半島と連動する岩国基地反対住民のたたかいと今後の課題」、奄美からの報告で「奄美ミサイル・弾薬庫について」沖縄からの報告「辺野古について」以上4点の報告を受けました。その後、連帯発言やメッセージがあり、最後にまとめで参加者の意思の共有がされました。

◆フィールドワーク

2日目、午前中に「映像を見る会」と「基地フィールドワーク」と2手に分かれ、私はフィールドワークに参加しました。

広大な面積を誇る岩国基地の周りを車で移動し、さまざまな角度から見た基地内部の説明を受けました。また、少し離れたところに

愛宕山を切り開いて作られた「絆スタジアム」には野球場1面、サッカー場1面、ソフトボール場2面が併設されています。所有権はアメリカで、いわゆる「思いやり予算」によって作られたのだと説明がありました。

その後、午後からは岩国市役所前公園でミニ集会が開催され、岩国基地まで約1時間のデモ行進を行いました。



27日夕刻、上関に移動しました。(裏面に続く)

27日夕刻、上関町に移動し、「上関の自然を守る会」から過去の反対抗議運動の映像を交えながら懇談会が開催され、意見交換をしました。

28日9時から原発建設予定地を海上から視察し、豊かな自然と生き物を感じながら、原発建設の現状を目にしました。



◆参加しての感想

今回、岩国米軍基地拡張反対の声を上げる行動がメインでしたが、在日米軍施設・区域は31都道府県に置かれています。世界情勢ではロシアの侵攻や朝鮮のミサイル発射が問題となっています。日本政府はそれらのことで危機意識を国民に煽り、国防による軍事費の増額を打ち出しています。アメリカのご機嫌取りのために莫大な予算を割いて武器を購入し、憲法改悪を目論み、武力を行使することのできる国づくりに躍起となっています。

上関現地では原発建設に対して県民の中には反対派の数を超える推進派が多くいることを聞きました。推進派の言い分はやはり軍需産業や原発に関連する雇用の確保と経済の安定というもので如何に依存しているかが分かります。もちろん心の底から推進しているの

上関原発予定地視察

ではなく、「生活のため」ということです。

原発推進派の方から聞いたのが「反対運動をこれから何十年にも渡り、子や孫の世代まで背負わすことになるくらいなら反対運動でなく、過疎化が進むこの街を違った形で町おこしをすべきでないかという考えに行き着いた」と聞きました。



原発や反基地闘争でも反対、推進という議論を身内でもケンカになり仲たがいの関係で家庭が崩壊してしまった例も珍しくないと言われています。ただ「原発は電気の供給を受けたい地域から離れたところに建設されている。電力が必要なら都心に作ればいい。なぜここで建設する必要があるのか」という気持ちがあり「矛盾しているのを感じながら日々考えている」と話されました。

◇

私はこういった話を聞いたのは初めてで、正直考えさせられるものがあると思いました。私は今まで、ただ単に悪いことと感じて、反対の声を上げていただけあった

かも分かりません。



もちろん米軍基地や原発を容認する気持ちは毛頭ありません。しかし、今後反対の声を上げるだけでなく「誰もが安心・安全に暮らしていける世の中」にするための行動を考えていかななくてはならないのではと思いました。

近年コロナ禍の中、経済は低迷し、それに加えて原材料価格の高騰による物価高で我々の生活は疲弊しきっています。そんな中、日本政府は増税や社会保障の切り下げによって国民の生活を締め付ける施策繰り返しています。

強き者を優遇し弱者を切り捨てる現在の政治を作り出したのは間違いなく現在の与党です。アメリカを守り、日本を本当に守らないといけないときに人命を守ろうとしない岸田政権を打倒しなくてはなりません。私は今後、基地や原発問題では賛成・反対という2極で判断するのではなく、「人の命を守るためにはどうしたらよいか」という議論に寄せるべきではないかと、今回の行動で感じました。

(書記次長 横山 貴安基)